

平城宮跡と周辺の文化遺産の調査研究

奈良文化財研究所では、平城宮跡の保存問題を契機として、1960年代以降、平城宮跡とその周辺地域での発掘調査と研究を進めてきました。いっぽうで、平城宮跡の保存運動や遷都以降の集落の成り立ちに関わる研究、また、その史料の収集などにも努めてはいましたが、あまり本格的に取り組めていませんでした。

平城宮跡とその周辺地域において長い歴史を経て育まれてきた文化遺産は、奈良時代のものに限らず、この土地の歴史や文化の理解に欠くことはできません。しかし、近年の少子高齢化や人口流動等により、その継承が困難になってきています。また、地域から平城宮跡の保存運動や国有地化の記憶が、徐々に薄れてしまうおそれもあります。

そこで奈文研では、文化遺産部が中心となって、2023年度から平城宮跡とその周辺地域を対象に、地域の文化遺産に関する総合的な調査研究に取り組むこととしました。まずは、佐紀町・二条町・山上町・歌姫町について、土地利用・遺跡・水利施設・建造物・石造物・仏像・史料・絵図・古写真・名木・植生・暮らしと祭りなどについて調査する予定です。もし周辺に古文書をお持ちであるとか、昔のことをご存じでしたら、文化遺産部景観研究室までご一報いただけますと幸いです。調査成果がまとまりましたら、報告書として刊行し、地域での成果報告会などの開催も予定しております。すでに数点の未調査史料の発見にもつながっており、私たちが今後の発展を楽しみにしています。

(文化遺産部 吉川 聡・恵谷 浩子)



1901年頃の第二次大極殿の写真(東から)

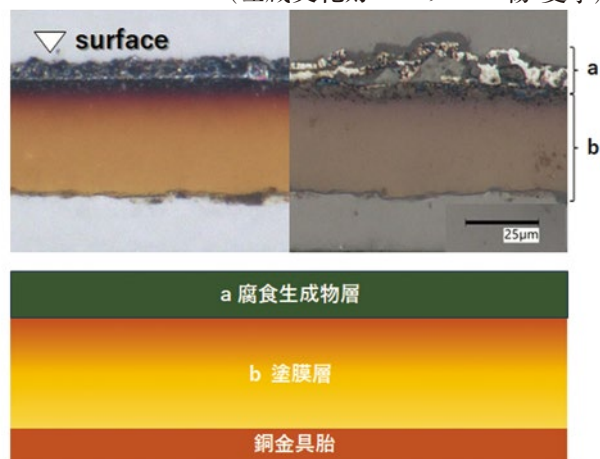
出土漆製品の劣化現象の理解とその解決に向けた取り組み

平城宮跡から出土する漆製品には、木材や金属などを胎としたものがしばしば見られます。経年劣化した木材や金属は非常に脆弱なため、保存処理をおこなう必要があります。このような漆製品に対しては、胎の材質にあわせて保存処理が実施されてきましたが、その際に漆塗膜が捲れ上がるなどの劣化が生じることが知られています。塗膜の変形を抑制する処理法を策定するためには、なぜ塗膜の変形が生じるかをあきらかにする必要があります。埋蔵文化財センター保存修復科学研究室では、平城宮跡出土の金属製品から剝落した塗膜を対象に、その変形メカニズムを解明するための材質・層構造調査を進めています。

本調査により、資料はaおよびb層の2層構造となっており、a層は銅の腐食生成物層、b層は塗膜層と推定されました。また、a層とb層の境界付近が深い色へと変化していること(図)、b層の表面(a層と接する面)と接着面(胎と接する面)では成分に違いがあることがあきらかとなりました。これは塗膜の作製方法や埋蔵環境中における劣化の影響によるものと考えられます。表面と接着面の塗膜の成分に差異があるため、保存処理溶液で処理した際に表面と接着面で膨潤の挙動が異なり、変形が生じた可能性が示されました。

これらの成果を学術発表し、他分野の研究者と意見交換を進めています。この課題を解決するため、広い視野を持って引き続き研究を進めていきたいと考えています。

(埋蔵文化財センター 楊 曼寧)



塗膜のプレバート 上：顕微鏡写真/下：塗装構造図